

17	刈谷	刈谷市立東刈谷小学校	ミヤバヤシ タカヒロ 名前 宮林 孝太
分科会番号	14	分科会名	特別支援教育

研究題目

自分の考えや思いを言葉で表現する児童の育成 ー生活単元学習「カフェをひらこう」の実践を通してー

研究要項

1 主題設定の理由

本学級は、1年生1名、2年生1名、3年生1名、4年生2名、5年生1名の計6名で構成される知的障害学級である。興奮すると大きな声を出して周りを驚かせてしまう子や目の前にある物を手当たり次第に触ってしまう子など、それぞれの児童が多様な特性をもっているため、日々楽しくにぎやかに過ごす一方でけんかや物の紛失などのトラブルが絶えない。教室のカーテンやドアを開けるのか閉めるのかでもめたり、朝登校したときにはあったはずの体操ズボンが体育の授業時になくなっていたりした。こういったトラブルが生じた際には必要に応じて教師が介入して問題解決に向けた支援を行っているが、教師からの「どうしましたか？」や「どうしたいですか？」という問いかけに対して、かたくなに口を閉ざしてしまうこともあれば、「分からない。」とだけ答えて終わってしまうこともあった。このような自分の考えや思いを言語化できない状況は学習面でも見られた。教師が物語の動画を途中で一時停止して「この後、主人公はどうすると思いますか？」と尋ねると、勢いよく手を挙げて発言を求めてみたものの「分からない。」と言って座ってしまったことがあった。また、振り返りの場面で教師が「今日の反省を踏まえて、次の時間に何ができるようになると思いますか？」と尋ねても、言葉での受け答えができずにその場で固まってしまうこともあった。生活面や学習面において、児童が自分の考えや思いを言語化できない様子を見るたびに「自分の考えや思いを相手と伝え合うことで、より豊かな生活を送れるようになってほしい。」という思いを強めていった。

そこで、研究主題を「自分の考えや思いを言葉で表現する児童の育成 ー生活単元学習『カフェをひらこう』の実践を通してー」と設定した。

2 目指す子ども像

主題を踏まえ、目指す姿を次のように定めた。

自分の考えや思いを言葉で表現する子ども

なお、「言葉で表現する」とは、自分の考えや思いを自分の言葉で伝えることである。

3 研究の仮説

本研究では、目指す子ども像に迫るために以下の2つの仮説を立て、実践を通して児童の変容から仮説を検証することにした。

(1) 仮説 1

児童が夢中になる魅力的な単元を構想すれば、自分の考えや思いを言葉で表現することができるようになるだろう。

(2) 仮説 2

自らを振り返る経験を積み重ねれば、自分の考えや思いを言葉で表現することができるようになるだろう。

4 研究の手だて

(1) 仮説 1 に対する手だて：育てたサツマイモを提供するカフェを開く単元を構想する。

育てたサツマイモで作ったデザートを提供するカフェを開く単元を行うのは今年で3年目になる。今年度の特別支援担当教員で今年度の児童たちの実態にあわせた単元を構想する。

	単元の学習過程	サツマイモの栽培過程
出 合 う	①先生からのビデオレターを見て「今年もカフェを開きたい。」という思いをもつ。 ②今年のカフェをどんなカフェにするのかをみんなで考える。	4月) 畑の草むしりをする。 畑を耕して畝を作る。 5月) サツマイモの苗を植える。 水やりをする。
深 め る	③飲食店の店員さんがどんな仕事をしているのか、家族でお店に行って調べてくる。 ④調べてきたことをみんなで共有する。 ⑤地域のカフェに出かけて(校外学習)、すてきな店員さんになるためのポイントをインタビューする。 ⑥インタビューの内容をみんなで共有する。 ⑦すてきな店員さんになるためのポイントをみんなで共通理解する。 ⑧すてきな店員さんになるための練習をする。 ⑨カフェの招待状を作る(家族宛と先生宛)。 ⑩カフェを開く準備をする。	6月)～8月) 畑の草むしりをする。 水やりをする。 9月) サツマイモのツルを返す。 10月) 試し掘りをする。 11月) ツル切りをする。 収穫する。
生 か す	⑪カフェを開く。 ⑫4月からの取り組みを振り返る。 ⑬学習発表会で発表する。	 12月) 保存する。

(2) 仮説 2 に対する手だて：「何ができたら〇なのか。」を自分で考える場を設定する。

授業の振り返りの場面で、児童が次時に向けて具体的な目標を設定できそうなときに、教師と児童が1対1の対話形式で行う。まず、本時の目標が達成できたのかどうかを問う。本時の目標が達成できていなくても、よかった点を問う。次に、単元の目的を確認して、次時の授業内容を教師が児童に伝える。最後に、本時の目標の達成度を受けて、次時は何ができたら〇なのかを問う。ここで児童が発した「何ができたら〇なのか。」が、次時の授業で教師から提示される個別の目標となる。

5 研究の方法

(1) 抽出児童 A（4 年生）の捉え

児童 A は、身体障害者手帳や療育手帳といった手帳は持っていない。また、2022 年に実施した WISC-IV の結果は、言語理解が 72、知覚推理が 109、作業領域が 57、処理速度が 96、全検査 IQ が 79 であった。検査の結果から、視覚的な作業を素早く行うことや視覚処理は得意だが、言語理解や聴覚的な情報を頭の中で保持して操作することに課題があると判断されている。

児童 A は、自分の考えを相手に説明したり自分の思いを相手に伝えたりすることに対して、苦手意識を持っている。それを裏付ける出来事として、算数の授業中に教師から「どうしてその式になると思ったのか教えてください。」と問われると、「えっと、何だったっけなあ。やってるときは分かってたつもりなんだけど、説明って言われると困っちゃうんだよな。」と話し、立式の根拠を説明することができなかった。また、低学年の児童から嫌がらせを受けたときに、「先生、〇〇さんから△△をされました。嫌でした。」と報告に来た児童 A に対して教師が「それで、A さんはどうしたいですか？」と言葉を掛けると、「私、だれかに嫌だってことを伝えることが苦手なんです。先生、代わりに言ってくれませんか？」と口にした。

これらの実態から、本実践を通して以下のような変容が児童 A に見られることを期待したい。

<実践前の児童 A>

・自分の考えを相手に説明したり自分の思いを相手に伝えたりすることに対して苦手意識をもっているため、意見を求められるとその場で立ち止まってしまうことがある。



<実践後の児童 A>

・自分の考えを相手に説明したり自分の思いを相手に伝えたりすることに対して苦手意識をもっているが、意見を求められたときに答えようとすることができる。

(2) 検証の方法

学校生活の中での発言内容や学習活動への取り組みの様子から児童 A の変容の様子を見取る。

6 授業の実際と考察

(1) 本単元と出会い、カフェを開くことに興味をもつ児童 A

第 1 時は、「昨年カフェに来られなかった先生たちから特別支援学級宛にビデオレターが届いた。」というシナリオを教師が用意して、今年度の児童と本単元の出合いの場とした。ビデオレターが届いたことを聞いた児童たちは、口々に「何？何？」「誰から？」「何の話？」と疑問を発してプロジェクターに映し出された画面に注目し始めた。校長先生からのビデオレター（資料 1）を見終えた児童 A は自席で、「サツマイモの芋よう

資料 1：校長先生からのビデオレター全文

5 組から 10 組のみなさん、こんにちは。「みんなが作った芋ようかんをもらった。」という話を前校長から聞きました。サツマイモで作ったその芋ようかんが「とてもおいしかった。」と聞いたので、私も食べたいと思いました。ぜひ、今年もサツマイモを育てて、そのサツマイモで作った芋ようかんを食べさせてください。よろしくお願いします。

かんか、私も作ってみたいな。」と口にした。児童Aは令和6年度の3学期に本校に転校してきたため、本単元に参加するのは今回が初めてであった。校長先生に続いて亀山先生からのビデオレター（資料2）も見終えた児童Aは自席で、「えっ、カフェって何？カフェなんてやったの？いいなあ、私もやりたい。」と教師に向かって口にした。

資料2：亀山先生からのビデオレター全文

みなさん、元気に過ごしていますか。実は、教頭先生から「去年カフェをやって、そこで食べた芋ようかんがとてもおいしかった。」と聞きました。私は去年その日が出張だったため、残念ながら食べられませんでした。だから、この芋ようかんをぜひ食べたいって思っています。もし、今年もカフェをやるのであれば、私も呼んでください。

第2時は、今年度のカフェをどんなカフェにするのかをみんなで話し合った。「ぼくは亀山先生に来てもらいたい。」や「私は芋ようかんを出すカフェにしたい。理由は、校長先生が食べたいって言うっていたから。」と発言する友達の意見を聞いていた児童Aは、自ら手を挙げて「私も先生や家族を呼びたいです。それに、カフェに来たお客さんにおいしい芋ようかんを食べて喜んでももらいたいです。」と発言した。

第1時や第2時で児童Aがつぶやいたり発言したりした内容から、児童Aが本単元に興味をもっていることが読み取れる。また、第2時の「喜んでももらいたい。」という発言から、教師が第2時に伝えた本単元の目的を理解して受け入れていることが読み取れる。児童が本単元に夢中になれるように導入を工夫したことで、児童Aが本単元に興味をもち、自ら自分の思いをみんなに伝えたものと考えられる。

(2) 地域のカフェに出向いて学んだことをみんなに伝える児童A

第5時は、地域にあるカフェに行き、店員さんにインタビューをした（資料3）。このカフェは昨年度もお世話になったお店で、インタビューの前に教師がお店を訪問して、今年度もすてきな店員さんになるためのポイントを中心にインタビューに答えてもらうよう、打ち合わせ済みだった。お店側に配慮して、インタビューに出かけたのは児童Aを含めて計6名の児童だった。「□□さん（店名）のいろいろないいところを知れたら○。」という個人目標を胸にカフェの見学を始めた

資料3：見学の様子



児童Aは、「注文を受けたときはメモを取っていました。」や「（ケーキやコーヒーを）置くときは両手で置いて、お客さんと目線を合わせていました。」など、接客をする店員さんの様子を見て気付いたことをメモ（資料4）に残していた。見学を終えたカフェから学校への帰り道で、教師が児童Aに振り返りを促すと、「□□さん（店名）のいいところをたくさん見つけれました。先生、今日このメモをまとめたいから、家に持ち帰ってもいいですか？」と話した。メモを持ち帰る許可を得た児童Aは「帰ってからまとめるのが楽し

資料4：児童Aのメモ

ちゃんをうけたときはメモ
をとっていました。おとりおりを
はこぶときはゆっくりとまっすぐお
いていました。おとぶときはおち
でおいておさやさんと目線をあはせ
ました。コーヒーは600円〜700円です。

みだな。」とつぶやいた。

第6時は、インタビューの内容をカフェに行けなかった子たちと共有する場とした。代表でインタビューに出かけたメンバーの一人としてみんなの前に立った児童Aは、目線を合わせることやコーヒーの価格が600円から700円であったことを報告した（資料5）。

第5時で児童Aがたくさんのメモを取ったり真剣な表情で店員さんに質問をしたりする様子から、児童Aが継続してこの単元に夢中になっている様子が読み取れる。教師が地域にあるカフェへの校外学習を企画したことによって児童Aはさらにこの単元に夢中になり、教師とのやりとりの中で自己評価を述べたり、学んだことを分かりやすくみんなに伝えたりすることができたと考えられる。

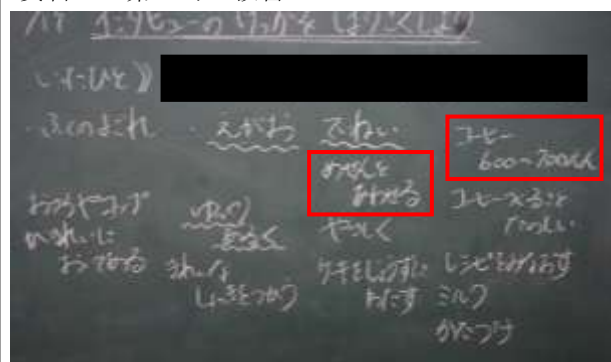
（3）接客の練習をする中で、自分の考えや思いを言葉にして表現する児童A

第8時から第11時までの時間は、すてきな店員さんになることを目指して接客の練習を行った。児童たちが調べてきたことを基にして、すてきな店員さんになるための3つのポイントが「身なり、丁寧、笑顔」であることを児童と教師の間で共通理解していた。また、練習を始めるにあたり、カフェでの児童の役割を、オーダー係、飲み物係、デザート係の3つに教師が分けた。児童Aは今年度が初めての参加ではあったが、その実態からオーダー係を担当することになった。オーダー係の仕事内容は、来店したお客さんを席に案内すること、お客さんの注文を受けること、お客さんから受けた注文とお客さんの人数を記したメモを飲み物係とデザート係に届けることの3つである。

第9時は、カフェ本番の会場である家庭科室を使って接客練習を行った（資料6）。第8時に行った教室での接客練習後の振り返りで児童Aは「コースターを正しいタイミングで置くこと。」を課題として挙げていた。児童Aは、「コースターを正しいタイミングで置くことができれば○。」という目標の達成に向けて1回目の練習に取り組み、見事にその課題をクリアした。しかし、新たに「正しいタイミングでメモを書くことができてい

なかった。」という課題が見つかったため、その後、何回か練習を繰り返し、この時間の最後の練習の様子をタブレット端末で動画に残した。動画で自分の接客の様子を確認した児童Aは、教師からの「目標は達成できましたか？」の問いに「コースターを正しいタイミングで置くことはできました。」と答え、「次回の練習では何ができれば○だと思いますか？」の問いには「もっと笑顔でやれた方がよかった。それから、結構勢いよく歩いているように見えるから、ゆっくり歩いた方がいいと思った。」と答えた。

資料5：第6時の板書



資料6：第9時の接客練習の様子



第10時は、家庭科室を使った2回目の接客練習を行った。児童Aは前時の振り返りを参考にして、「笑顔で接客すること」と「まっすぐに立ってふらふらしないこと」を個別の目標として設定した。一通りの流れをよく理解した児童Aは、お客さんとのやりとりで困った様子を見せることはなかった。1回練習するごとに簡単な振り返りを行ったことで、よかったことと次の課題を自分で考えて教師に伝えることができた。動画を見た後の振り返り（資料7）では、「笑顔で接客することはできたと思う。」や「少々お待ちください、の語尾をあげると優しい言い方になると思う。」と話した。児童Aの練習の様子を見ていた友達から「お客さんと話をしているときに笑顔になれるといい。」とアドバイスをもらうと、「次回の一番の目標は、笑顔でお客さんと話すこと。」と発表した。

資料7：動画で振り返る様子



接客練習において、児童Aは教師との1対1のやりとりの中で自分の考えや思いを明確に言葉で表現することができた。これは、「何ができたら〇なのか。」を自分で考える場を設定したことによって、児童Aが個別の目標を常に念頭に置いて練習に取り組んだ成果であると考えられる。

7 研究の成果

(1) 仮説1に対して

第1時でビデオレターを見て「サツマイモ」や「カフェ」といったキーワードに興味をもった児童Aが、第2時で自ら挙手をして「カフェに来たお客さんにおいしい芋ようかんを食べて喜んでほしいです。」と、自分の思いを言葉で表現することができた。また、地域のカフェに出向いて学んだことをみんなと共有する場面では、一度家に持ち帰ってまとめ直した自分の考えを言葉で表現することができた。これらのことから、自分の考えや思いを言葉で表現することができるようになるために、児童が夢中になる魅力的な単元を構想することは有効であったと考えられる。

(2) 仮説2に対して

地域のカフェの見学やカフェの接客練習など、具体的な目標を設定することができそうな場面において、教師が「何ができたら〇なのか。」を問うことで、児童Aは個別の目標を設定することができた。さらに、個別の目標の達成に向けて活動に取り組んだ児童Aは、目標の達成度や自分のよかった点、次時の目標について自分の考えや思いを言葉で表現することができた。これらのことから、自分の考えや思いを言葉で表現することができるようになるために、自らを振り返る経験を積み重ねることは有効であったと考えられる。

8 今後の課題

本単元の中での児童Aは、多くの場面で自分の考えや思いを言葉で表現することができていたが、依然として自分の考えや思いを言葉で表現することへの苦手意識は払拭されていないものと考えられる。そんな児童Aが苦手意識を抱えながらも、多様な環境の中で自分の考えや思いを言葉で表現していけるように、効果的な支援を模索していきたい。